

第1章 出会い

のぼるは小学校5年生。のぼるは小柄な男の子。でも、実は、のぼるは、いじめっ子だ。いつもののぼるは、何かにイライラしていた。早く給食を運んでくれないクラスの子。何を言っても、下を向いているクラスの子。そんなクラスの子をかばう先生たち。いつもぺこぺこしているお父さんとお母さん。でも家では、お父さんもお母さんもケンカばかりしているじゃないか。

何が悪いんだ？僕は自分の好きなことをして、キライなことをしたくないだけなんだ。僕のこと、だれがわかってくれているんだ？だれも僕のことをかばってくれない。だれも僕のことを見てくれていない。だれも僕のことを認めてくれていない。

いつも、のぼるはそう思っていた。のぼるはまわりのことも、自分のことも大キライなのだ。

ある日、いつものように、給食袋を振り回しながら、家に帰っていた。今日も、学校はつまらなかった。授業はちんぷんかんぷんで、先生が言っていることはよくわからないし、みんなのようにうまく板書もできない。そもそも、のぼるは漢字をうまく書けなかった。マスからとびでてしまう。何回もたくさん書かされることは苦痛でしかなかった。だから、授業中は、えんぴつの芯で机をガリガリさせることに熱中したり、ノートに落書きして、ヒマな時間を過ごしていた。そんなのぼるを、まわりのみんなも、大人たちも、ただ「やる気の無い」子だと思っていた。

そんなつまらなさを給食袋を振り回すことで、解消されている感じがいつもしていた。その独特の重みが、のぼるの手と腕にかかり、そして振り回している力が、自分のつまらなさをまわりにまきちらしている感じがしたのだ。

まわりも、僕と同じようにつまらなくなればいい。

のぼるが家に帰るには、いつも神社を通らなければならなかった。通学路に神社があるのだ。のぼるは、この神社がおそろしかった。いつもののぼるは人をいじめている。物をこわしている。その「悪」は、のぼるにもわかっていた。でも、どうしてもやってしまうのだ。だから、この神社を通るたびに、なにか天罰がやってくる感じがしたのだ。

その日は、とくにつまらない日で、いつもは神社では振り回さない給食袋を、知らないうちに振り回し続けていた。振り回していることを、のぼるは気が付いていなかった。

「あっ」

気が付いたら、給食袋で、神社のとうろうをぶつけていた。

また、やってしまった。また、みんなに怒られる。みんなにばれる前に逃げてしまおう。

そう思った瞬間だった。

そう、あの「人」と出会ったのは。

「う～ん」

女性の声がした。

この「人」はどこから来たんだろう？さっきまで、だれもいなかったはずなのに。その「人」は、とても不思議だった。もちろん、顔も、体も、うでも、そして足もついていて。でも、そのまわりには、不思議な光に包まれていた。その光の色は、何色とも言えない、でも今まで見たことのないきれいな色をしていた。まるで、世界中にあるきれいな色をかき集めてきて、そしてそれをきれいに混ぜたようだった。

のぼるは、自分でも知らないうちに、じっと、その「人」の顔を見ていたようだった。

のぼるは、その「人」を見ていて、あることを思い出していた。

のぼるは、幼いころから、なんとなく直感が強い子だった。たとえば、幼稚園のまなみちゃんの手が少し黒く見えていたときがあった。これから、けがをするのかな、となんとなく、でもきっとそうなるだろうと、確信をもって思っていた。すると、次の日に、まなみちゃんの手には、包帯が巻かれていた。階段から落ちて、手をけがしたのだと、言う。

またある時は、小学校の担任の先生、女性で28歳（この歳は、クラスメイトが先生に直接聞いて、わかったのだけれど）のおなかのまわりだけ、なんだかぼんやり光っているときがあった。その数日後に、担任の先生にあたらしい赤ちゃんができたことを知った。まだ、おなかはふくらむ前だったけれど、休養で先生が少しお休みをしたので、わかったのだ。

またある時は、お母さんと一緒にいたときに、どうしても寒気がした。それは一日だけだったけれど、お母さんが部屋に入ってくるたびに、お母さんと話をするたびに、背中の方が「ぞくっと」したのだ。でも、のぼるには、それがこわいわけではなかった。ただ、ぞくっとした感覚が背中にあるだけだった。その一日は、お母さんのまわりで、よく「ぱっ」と光が見えた。それは、かみなりのようにも見えたし、ただ、部屋の電気がちかちかしているだけにも見えた。

そう、幼いころから、そんなことがよくあった。

あまりによくあるから、のぼるには、それが普通だと思っていた。

みんなも同じように見えていて、同じような感覚があるのだと思っていた。

去年の冬、雪合戦をしていたときのことだ。友だちのいないのぼるは、雪合戦であそんでいた。というよりも、通りかかったクラスメイトに、雪をぶつけていたのだ。クラスメイト

にあてては、とつぜんやってきた雪玉にびっくりしたその子の表情を見て、楽しんでたのだ。

ははは。ざまー、みろ。

そこに、クラスメイトの一人の、かけるがやって来た。かけるは、名前どおり、走るのが速い。その速さを生かして、サッカーをやっているらしい。小学校では、走るのが速いことは、とても尊敬される。だから、クラスでも、人気ものだった。しかも、かけるは、そのことを自慢したり、足の遅い子をバカにしたりしなかった。でも、のぼるには、とても苦手な存在だった。得意なことがあっても、それを自慢しないかけるは、苦手なことが多すぎるぐらいあるのぼるには、近寄りがたかった。だから、かけるには、ちょっかいをだしたことがなかった。

しかし、その日のかけるは、少し様子がおかしかった。いつもなら、友だちにかこまれて、楽しそうに話をしているかけるだが、今日は一人だ。

かけるのまわりには、グレーのような空気がただよっている。いつもは、そんな空気は見えない。

どうしたんだろう。あのグレーの空気は、あんまりいい調子ではないことを示していることを、なんとなく、のぼるはわかっていた。でも、のぼるには、話しかける勇気もない。そもそも、かけるとはあまり話をしたこともない。

のぼるは、自分の手の中にあつた雪玉を、そのまま地面に落とす。

「だれだ？」

その落とした雪玉の音で、かけるは、のぼるに気がついた。

「なんだ、のぼるか。何してるんだ？こんなところで」

不思議そうな顔で、かけるは、のぼるを見ている。

「あ、いや…」

なんと答えていいかわからない。当たり前だ。雪玉を人にあてて楽しんでた、とは言えない。というよりも、やってはいけないことぐらい、のぼるにもわかっていたので、言えないのだ。

「また、みんなをいじめていたのか？」

うっ。かけるは、わかっていた。

気まずい空気が流れる。

「それよりも、どうしたんだよ？おまえのまわりに、グレーの空気がただよっているぞ」

のぼるは、自分の話題からはずれたくて、そう言った。

「どういう意味だ？グレーの空気ってなんだよ？」

「だから、ときどき、あるだろ？人のまわりにある空気の色だよ」

「なんのことを言っているんだ？」

だんだん、かけるの表情がくもってくる。それを見て、のぼるは、違和感を感じ始めていた。なんで、話が通じないんだ？

「だ・か・ら・、ときどき、人のまわりに、色が見えるだろ？赤とか、黄色とか、青とか、緑とか、グレーとか！」

「のぼる、大丈夫か？目になにか病気でもあるんじゃないのか？」

すたすたと、かけるは、少し逃げるようにして、行ってしまった。

なんで、かけるは、わからなかったんだろう？もしかしたら、あの色が見えるのは、ぼくだけなんだろうか？

もやもやした気持ちで、家に帰った。

家に着くと、めったに家にいないお母さんが家にいた。

あれっ？今日は仕事、もう終わったのかな？少しウキウキした気持ちで、おやつを食べていた。おやつは、家にあるものを、いつものぼるが適当に選んで食べている。

「じゃ、のぼる、お母さん、また仕事に行かなきゃいけないから。ごはんは、電子レンジの中のものを温めて食べてね」

忙しそうに、行ってしまった。

なんだ。お母さん、仕事が終わったんじゃないか。本当は、のぼるは、あの空気の色のことをお母さんに聞いたかった。お母さんならきっと見えているはず、きっと、ぼくと同じものが見えているはず、と思いたかった。

のぼるはいつものように、ゲームをし始めた。でも、かけるとの話が頭から離れない。なんで、あの時、かけるはあんな表情をしたんだろう？

そうだ。

のぼるは、コンピューターを開いた。家では、ゲームばかりしているのぼるは、コンピューターの操作も苦もなくできた。インターネットで調べてみればいいんだ。

「空気 色」で検索してみる。

だめだ。空気の色として検索してしまう。

「空気 色 見える」う〜ん。だめだ。やっぱり、同じだ。

「人 色 見える」で検索してみた。「オーラ」という聞きなれない言葉がでてきた。のぼるは、漢字が苦手だったので、あまり、説明を読んでもよくわからなかった。でも、わかったことは、それが見える人があまりいない、ということだった。

ということは、ぼくが見えているこの色は、きっと目のさっかくだったんだ。見まちがいだったんだ。

のぼるは、その日以来、そう自分に言い聞かせてきた。

だから、この「人」が現れるまで、自分に人とはちがうものが見えることすら、のぼるは忘れかけていたのだ。自分に言い聞かせていたので、だんだん、その空気はあまり見えなくなっていった。そして、今では、まったく見えなくなっていた。

とうろろで出会った「人」のいろいろな色を見ているうちに、そんなことがありありと鮮明に思い出されてきた。それとともに、かけるが変な顔で見てきたことも、そのときにあった不安な気持ちもよみがえってきた。

「それは、残念なことだね。」

え？何が？

「だから、のぼるくんが、自分の見ているものをうたがったことよ。」

あれ？ぼくは、自分の考えていることを口にだしているんだろうか？

「ううん、してないよ。でも、わたしには、のぼるくんの考えていることが、聞こえてくるの。」

は？どういうこと？

「わたしが、のぼるくんの考えていることに周波数をあわせているんだよ。」

のぼるには、周波数という言葉自体知らなかったし、とにかく、自分の考えを読まれていることが、とてもおそろしかった。

「ごめん、突然、考えを読まれていたら、こわいよね。でも、大丈夫。のぼるくんが、こうやって、わたしが見えていることに、意味があるのだから。」

にげよう。そう思った。あまりにこわすぎる。

「待って。わたしは、のぼるくんに危害をあたえようと思っていないよ。その逆なの。わたしは、のぼるくんをみちびきたいと思っているの。」

突然、のぼるには、その人のすがたがはっきり見えた。今まで、光に気をとられていて、その「人」のすがたまで注意をはらっていなかったのだ。

その「人」は、やさしくほほえんでいた。その「人」は女性だった。たぶん、お母さんと同じ年ぐらいか、少し若いぐらいだ。そして、きれいな洋服を着ていた。その服は、どこかの民族衣装にも見えた。色は白っぽくて、頭からベールのようなものをかぶっていた。長いきれいな黒い髪をしていた。そして、目は緑色だった。その緑色の目を見ていると、とてもあたたかい気持ちになってきた。彼女のやさしさが、その目から伝わってくる。まるで、小川のせせらぎのように。

「やっと、見えたみたいね。よかった。」

今まで、のぼるがちゃんと見ていなかったことも、その「人」にはわかるようだった。

「わたしは、この神社のとうろうにいたの。のぼるくんが給食袋をふりまわしていたのも見
ていたわ。そして、今日、とうろうにぶつかったことも。でもそのおかげで、こうやって、
のぼるくんの前にいて、こうやって、お話しすることができた。」

え？え？え？

のぼるのあたまの中には、「？」しかない。何を言っているんだろう？まったく、意味が
わからない。

でも、その「人」のやさしきは伝わってきている。だから、のぼるには、わかっていた。
彼女が言っていることは、真実であって、うそいつわりがないことも。

「そう、わたしが言っていることは、きっと、のぼるくんには理解するのに時間がかかると
思う。それでもいいの。でも、心はオープンにしておいて。」

ここをおおふんにする？どういうことだろう？

「わたしが言っていることを、うそだ、とか、ぼくをだましているんだ？とか、そんな考え
にしばられないことよ。わたしが言っていることが、100パーセントわからなかったとし
ても、それでもいいの。ただ、そんなこともあるんだ、と受けとめられるように、聞いてほ
しいの。たとえば、かけるくんに、のぼるくんの言っていることを、「何を言っているんだ？」
とはねのけられたでしょう？」

なんで、そんなことまで知っているんだ？

「ふふ、のぼるくんが見てきたもの、聞いてきたもの、感じてきたもの、すべて経験してき
たこと、知っているのよ。」

どうやって？

「だんだん、わかってくるわ。

かけるくんの話にもどるけれど、かけるくんが、のぼるくんの言っていることを全く信じ
なくて、行ってしまったとき、どんな気持ちでした？」

いやだった。

「そう、いやだったよね。もっと、言うと、不安になったのではないかな？」

なんで、わかるの？

「いいの。不安になっていいのよ。自分の言っていることを、まわりが信じてくれないと、
不安になるのは、自然なことなの。そして、のぼるくんは、そのあと、何をしたのか覚えて
いる？」

もちろんだ。たとえ、1年前に起きたことでも覚えているぞ。空気のこと、見まちがい
だ、と言い聞かせてきたんだ。

「そうね。そして、実際に、その空気は見えなくなっていった。他の人が見えていないから。でも、それは、のぼるくんにあった能力を否定してしまったことになるの。そして、その能力がなくなったことで、のぼるくんの世界はせまくなったの。」

たしかに、空気が見えなくなってから、のぼるは、実際に困ることもふえ、そして、ひとりぼっちの感じがどんどん強くなっていった。

「それは、孤独感ね。まわりに人がいても、いなくても、自分で自分を否定してしまうと、どんどんひとりぼっちになっていくのよ。孤独を感じるの。否定というのは、こんな自分はダメだ、とか、こんなこと思っはいけない、とか、こんな感情をもっはいけない、とか、そして自分なんていないほうがいいんだ、とか、自分で、自分のことをNOと言うこと。」

そうか。この1年、とてもくるしかった。なんだか、だれもぼくのことを見てくれていない感じが強く強くあった。それは、まわりがわるいんだ、と思っていた。

「ちがうのよ。きびしいかもしれないけれど、のぼるくんは、自分で自分を見てあげていなかったの。だから、まわりも自分のことを見てくれていない感じがしたのね。そうやって、自分の世界がちいさくなっていったのよ。」

あなたの、その空気が見えることは、能力なのよ。もっと自信をもっていいの。きっと、その能力は、のぼるくんの力になっていくから。」

たしかに、あの空気が見えることで、のぼるは助けられることも多かったのだ。それは、のぼるに「ヒント」を与えていた。

たとえば、お母さんがつかれていたとき、お母さんの頭のまわりには、グレーの空気がただよっていた。その空気を見て、もう少しお母さんは、眠ったほうがいいのではと思って、洗濯物を取りこんだり、食器を洗ったりした。今までそんなこと、自分からしたこともない。お母さんは、おどろいた顔をしていたけれど、とてもうれしそうだった。そして、1時間ぐらい昼寝をしに行った。起きたときには、そのグレーの空気はなくなっていた。すっきりした顔をしていたお母さんがいた。

「そう、あのとき、お母さんは休養が必要だったの。もし、あのお昼寝がなかったら、お母さんは、頭痛がして、そして、1週間ぐらい寝込んでいたのよ。他の人は気づかなかったでしょう？」

そういえば、あのとき、お父さんは、お母さんのつかれに気が付いていなかったようだった。お母さんは、そういうことをかくすのだ。ガマンしてしまうのだ。

「さあ、話はこれぐらいにして、さっそく、旅にでてみましょう。」

旅？ぼく、学校へ行かなくてもいいんだ！と思ったら、わくわくしてきた。

その「人」は少し笑った。

「ごめんなさい。のぼるくんは学校があまり好きではなかったわね。旅に出る、というのは、

どこかへ出かけるという意味ではないの。のぼるくんの「こころの」旅にでるのよ。」

また、変なことを言っている。よく意味がわからない。

「さっきも伝えたとおり、今はまだ意味があまりわからなくてもいいのよ。ただ、これから、のぼるくんが学校へ行ったり、おうちにいるとき、いつでもわたしがそばにいるわ。そして、一緒に旅にでてみましょう。」

やっぱり、「旅」の意味はよくわからなかったけれど、でも、これから一緒にいてくれるのは、とてもこころ強かった。

「あ、そうそう。わたしの名前は、ミシャよ。」

「よろしく、ミシャ。」はじめて、のぼるは、声を口に出して言った。

ミシャは、そんなのぼるを見て、やさしくほほえむ。